

平成23年度第4回「大塚初重講座」（生涯学習応援ゼミナール）

装飾古墳の世界—日本の装飾古墳の独自性

中国・朝鮮半島の壁画古墳との比較

当NPO理事長の明治大学名誉教授大塚初重先生による、平成23年度生涯学習応援ゼミナール「大塚初重講座」の第4回講座を平成24年2月4日に開催しました。

昨年7月から、東国・九州の装飾古墳についての講義、そして茨城県虎塚古墳壁画の現地見学と3回行ってきた大塚初重講座「装飾古墳の世界」の最終回です。今回は、朝鮮半島の高句麗や中国唐代の壁画古墳との比較を通して、日本装飾古墳の特色と独自性を考える企画でした。

古墳時代に先立つ弥生時代に、直線と弧線で構成される「直弧文」と呼ばれる文様が、除魔あるいは神性を表すものとして祭祀や葬送に使う用具に施されています。そのような背景のもとに、日本装飾古墳の初期の壁画モチーフは、円文・三角文による幾何学文様が主体であり、これは朝鮮半島や中国には見られないものです。時代が下るに従い、人物・太陽・月・馬・船・武器等により、被葬者の安らかな成仏や生前の一シーンを描き出すようになる。という大きな流れについて講義がなされました。

次いで、スライドにより高句麗や唐代の壁画を紹介しつつ、日本の壁画との違いについて説明された。特に、日本考古学史上画期的な発見であった高松塚古墳の壁画について、男子・女子像の描き方から、高句麗より中国唐代の壁画に強い影響を受けているのではないかと指摘。一方、四神（玄武・青龍・白虎・朱雀）の存在から、朝鮮半島の要素も取り入れており、そのあたりが日本装飾古墳の特色であるとした。数多くのスライドを用い、非常にわかりやすい講義でした。



質疑応答に移り、出席者から「千葉県や茨城県の装飾古墳は、九州から移動してきた豪族の墓ではないか?」「古墳の被葬者は特定できないのか」などの質問が出されました。大塚先生からは、最新の調査や研究成果を引用しつつ、「考古学では、墓誌が出土しない限り被葬者を特定することは困難である。」「まだまだわからないことが多くあり、これからの研究によって明らかにされてくるであろう。」との回答がありました。

今回のテーマは、3～4時間の講義でも足りないような内容であり、それを1時間程度でまとめるには、大変なご苦勞があったと思われます。いつものように、エピソードを交えながら、初心者にもわかるように丁寧に説明してくれる大塚先生に、出席者全員から盛大な拍手が送られました。